

〔狭山市を愛した文学者 その1〕

童話と童句の土家由岐雄先生

広沢一岐

狭山市の高度成長期、著名な方々が次々と狭山市民となりました。狂言の山本則直師、仏像彫刻の小西竹次郎氏、国語学の宮地幸一博士の名が上げられますが、文学者としては土家由岐雄、詩人の吉野弘、劇作家・児童文学者のさねとうあきらの三先生が居られます。

童話の名作『かわいそうなぞう』で知られる土家先生は、昭和46年(1971)市内入間川1315番地へ引越してこられました。67歳の折です。先生の文学碑が智光山公園に建立されたのは、昭和61年5月です。

先生は、童話創作のかたわら〈子どもの視点で詠む俳句〉を童句と名付けて詠んで居られました。次のような秀作があります。

雨に鳴く こおろぎに ドアあけてやる
花散るや 鼻で旗ふる ぞうの芸
じゃんけんの はさみをくぐり ちるさくら



智光山公園の土家由岐雄童句碑

昭和61年8月のこと。私は狭山市史執筆の専門委員として土家先生と対談の機会を持ちました。その直後、童句を公民館学習の中へ位置付けたいと考え、講座の開催をお願いしました。当時、82歳のご高齢だった先生はなかなか承諾なさいません。数度の手紙のやり取りの結果、狭山台公民館での入門講座開講にこぎつけました。以後、多くの方々のお力添えにより、狭山市は〈童句発祥のまち〉の栄光をになうことになります。

先生は『文芸さやま』『文芸埼玉』の童話選考委員、『広報さやま』『文芸さやま』『読売新聞日曜版童句欄』『全国童句まつり』の童句選者を務められ、文化の向上に寄与されました。

生涯を通じて百五十余冊の本を残されましたが、その文学を通じて常に大きなテーマを追求しておられました。〈平和の熱望〉と〈童心の発露〉です。次の言葉は、8月に『彩の国だより』を通じての県民へのメッセージの一節です。

—— 戦後の大人は物質主義になってしまっていて、心の修養が必要だと感じました。
そのために一番いいのは少年・少女のような心になることです。

狭山市を愛し、狭山市民であることを感謝し続け(特に消防署の救急対応)、生涯現役を貫かれた先生は、狭山市の誇りです。

狭山市民謡協会

民謡のつどい

9月9日(土) 狭山市市民会館にて開催

第37回となる今年は初めて9月の開催です。

健鷹会(8名)の新加入があり、100名余の会員の唄、
合唱、手をつなぐ親の会による恒例の太鼓、津軽三味線、
そして会主の唄など、午後5時迄熱演が続きます。

皆様のご来場をお待ちします。(高沢正夫)



事務局便り

団体会員 21団体 会員数 686名
個人会員 30名
登録会員 21団体 会員数 607名
賛助会員 49名

会員総数1372名です。文化ボランティア4名にも支えて頂きながら「桜まつり」「青少年文化体験フェスタ」「狭山市民芸術祭」の3大事業を継続しています。今年度の最後の事業「狭山市民芸術祭」にむけてご協力をよろしくお願いたします。

事務局長 岸野智子